

Title	百濟の遼西領有説について
Sub Title	The territory Liao-si (遼西) of South West Manchuria : did it really belong to Pai-chi (百濟) in the Fifth century?
Author	和田, 博徳(Wada, Hironori)
Publisher	三田史学会
Publication year	1951
Jtitle	史学 Vol.25, No.1 (1951. 7) ,p.90- 100
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19510700-0090

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

百濟の遼西領有説について

和田博德

朝鮮の三國時代に半島の西南部に據つた百濟が遠く南滿洲の遼西を領有したと言ふ記事が正史の宋書や梁書及び南史の中に見える。即ち宋書卷十九百濟傳の劈頭に、

百濟國本與高麗、俱在遼東之東千餘里、其後、高麗略有遼東、百濟略有遼西、百濟所治、謂之晉平郡晉平縣、
とあり、又梁書卷五百濟傳の冒頭には、

百濟者其先東夷、有三韓國、一曰馬韓、二曰辰韓、三曰弁韓、弁韓・辰韓各十二國、馬韓有五十四國、大國萬餘家、
小國數千家、總十餘萬戶、百濟卽其一也、後漸彊大、兼諸小國、其國本與句驪在遼東之東、晉世、句驪旣略有遼東、
百濟亦據有遼西・晉平二郡地矣、自置百濟郡、

と述べてある。そして南史卷十九百濟傳の冒頭には、梁書に「其國本與句驪在遼東之東」とあるのが、「其國本與句驪、
俱在遼東之東千餘里」となつてゐて、この句だけ宋書と一致するが、他はすべて梁書と同一の記述がある。

ところで同じ南朝の正史であり乍ら、宋書と梁書との中間に位する南齊書卷五の百濟傳には百濟の遼西據有について

の記述が見えない。しかし、これは現存の南齊書の百濟傳の前半は、その直前の高句麗傳の後半と共に、不幸にも缺佚してゐるためであつて、本來は必ず宋書や梁書（南史）と同様にその冒頭の部分に遼西據有の記述があつたものと推定せられる。このことは後述によつても自ら證明されるであらう。ただ南朝最後の陳書には百濟傳も含めて一切の外國傳を闕くから、陳代のことは不明であるが、これによつて兎に角、南北朝時代に南朝側の宋齊梁代に於いて、百濟の遼西領有説が行はれてゐたことが知られよう。

ところが、右に挙げた以外には、當時の史料たる晉書や北朝側の正史を初め、遙か後世の作なる三國史記以下の朝鮮の文獻等には何れも百濟の遼西據有を傳へたものは無いのである。従つてこの百濟の遼西領有説は南北朝時代に於いても北朝側では行はれず、ましてその他の何れの時代にも全く認められてゐなかつたと思はれるのである。⁽¹⁾

實際、朝鮮半島の西南部にあつた百濟が、その間に高句麗を隔てゝ、遠く離れた遼西の飛地を所有してゐたなどといふことが、有り得べからざる奇怪の説であることは次に述べる如く明白なのであるから、これを荒唐無稽として從來の論者が捨てゝ問題にしなかつたのも不思議でない。

宋書や梁書によると、百濟が遼西を占領した初めは高句麗が遼東を有した時といふが、高句麗の遼東領有は西晉の末、かの五胡の争亂の際であつて、これより先き、晉の遼西郡は東部内蒙ゴの地に起つた五胡の一なる鮮卑の慕容氏の領する所となつて居り、それらは何れも第四世紀初頭のことと、第四世紀中葉以後と考へられる百濟の建國以前のこととに屬してゐる。そしてその後、南北朝時代に入ると、北魏が興つて遼西を領したのである。⁽²⁾かくの如く五胡・南北朝時代には、概ね遼河の線を界として、兩方とも百濟より遙に強力な東の高句麗と西の北狄諸國とが對峙して境を接してゐたの

であるから、この時期を通じて、その間に南方の百濟が割込む餘裕は絶対に有り得ないことなのである。

而もその占領地にあつたと稱する晉平郡晉平縣といふ郡縣の名は、その名からして恐らく晉の郡縣かとも思はれるが、晉の短い遼西領有期間中に、かかる名の郡縣を置いたといふことは頗る怪しいし、又、晉書地理志や魏書地形志などにもこの名は全く見えない。ましてや百濟郡については未だ嘗て聞かざる所である。

かう考へて來れば、南朝の史籍にのみ傳はる百濟の遼西領有説は歴史的事實に非ずとして、從來の如く葬り去るべき性質のものである。さればこそ中國史籍の記述をあれ程克明に採用して、後にも述べるやうな北魏の百濟侵入の虚説をさへ信じた三國史記の撰者も、この百濟の遼西領有説のみは却けたのであらう。しかしながら百濟の遼西領有といふ何人もその不稽を認めるやうな虚説が如何にして生じたのであらうか。又、それには一體如何なる意味があるのであらうか。

二

南朝側にのみ傳へられたこの百濟の遼西領有説の縁由を尋ねるには、南北朝時代に於ける百濟の對外關係を一通り考察する必要がある。初め朝鮮半島の南部にあつた韓族は、西紀三一三年、樂浪郡の覆滅の齎らした大變動の結果、國家形成を始め、第四世紀中葉の東晉時代に馬韓は百濟により、辰韓は新羅により各々統合された。かくてこれより以前に南滿・北鮮の地に貊族が建ててゐた北方の高句麗と對立して所謂朝鮮の三國時代は始まり、唐初に新羅の統一を見るまで續くのである。従つて中國の南北朝時代は朝鮮に於いては三國時代なのであるが、この三國の對立は、始めは高句麗の勢が最も強く他の二國を壓し、後には新羅が勃興して遂に半島統一を成就するに至る。ところで今、吾人が考察せん

とする南北朝時代の宋齊梁代は即ちその始めの高句麗強盛時代なのである。

三國の中、新羅は東南の僻地に離隔してゐたため、南北朝時代末期まで半島史の主要舞臺に登場しなかつたが、樂浪郡の故地を占領した高句麗と、帶方郡の故地を有した百濟とは早くより地を接して互に攻伐することとなつた。そして次第に高句麗は百濟を壓迫したが、特に第四世紀の末に、高句麗に廣開土王（三九一—四一三）が即位して、百濟より漢江以北の諸部落を奪つて以後、高句麗南下の勢は年を逐つて激しくなり、百濟はその強壓に苦しみ、新羅は之に服屬するに至つた。有名な廣開土王碑によると、第五世紀の初頭、高句麗の先鋒は日本軍を破つて任那にまでも達したことがあるやうである。日本は百濟・新羅の建國と殆ど同時に半島に進出し、百濟・新羅を保護して高句麗の南下を防いでゐたのである。以後、新羅は高句麗に附して日本に叛いたが、百濟はその建國から滅亡まで終始我が國に頼つたのである。

廣開土王に繼いで立つた長壽王（四一三—四九〇）の七十八年の永い治世は高句麗の全盛時であつて、その中に南朝の宋代を包み、齊代にまで亘つて、略々、南北朝時代の前半に相當するが、長壽王の十五年（四二七）に高句麗は國都を鴨綠江畔の丸都城（輯安）から平壤に移して、更にその南下策を推進した。蓋し、この頃、北魏が華北を統一したので、高句麗はその方面に進出する望みを抛棄し、南方の半島經營に専念することになつたのである。かくて高句麗の百濟に對する強壓は益々加はり、遂に長壽王の六十三年（四七五）、百濟の國都漢城（京畿）（廣州）は長壽王自ら率ゐる高句麗軍のために陥り、百濟の蓋鹵王は捕斬された。これより百濟はその地方を失ひ、國都を南の熊津（公州）（金北）に遷したのである。高句麗南下の勢はこの時絶頂に達して、その後、次第に衰へるが、南北朝時代末の第六世紀中葉に、東南の新羅が勃興して

局面を一變させるまでは、尙、暫くその百濟に對する壓迫が續いたのである。

以上によつて、南北朝時代前半期に於ける百濟の對外關係を概觀したが、要するにこの期間即ち略々西紀第五世紀に於ける半島史の大勢は、高句麗が強盛であつて、その南侵に對する百濟の防衛の歴史であつたと言ひ得るであらう。

かゝる高句麗の南下の勢に對して、百濟は如何にして防衛したであらうか。百濟が建國以來、我が國と特殊の關係を結び、度重なる朝貢や質子などによつて、我が國に依頼したことは日本書紀の明記する所であるが、これも一に高句麗に對して獨力當り得ない百濟の防衛策であつたのである。そこで西紀第五世紀の形勢は北の高句麗と南の日本との半島に於ける霸權爭奪戦とも見られるのである。⁽⁴⁾

かくの如く百濟は主として日本の援護に頼つて、國の保持を圖つたのであるが、西紀四三三年（百濟毗有王七年）には建國以來競爭狀態にあつた新羅と始めて和親を結び、以後、南北朝時代末期に新羅に眞興王が出でて新羅の強盛を見るまで約百二十年間、高句麗に對する百濟・新羅の連盟が繼續したのである。蓋し、日本は第四世紀に半島に進出した當初の勢を漸くこの頃より失ひ、百濟にとつて日本のみを頼りとしては覺束ない事情となり、同時に新羅は次第に興つて高句麗から離れ、こゝに至つて百濟と結んで、反つて高句麗の南下を反撃せんとする態勢に出たのである。⁽⁵⁾

百濟はこのやうに日本の保護を受け、或は新羅と連和して、強敵高句麗を防いたが、百濟の對高句麗策の重要なものに尙、中國通貢があつたことは見逃すべからざることである。

三

中國の周圍の國家が、中國に通貢し冊封を受けて、その威力を借りることは頗る利益があつたから、東晉時代から引

き續いて南北朝時代にはかの有名な倭國の瓊・珍・濟・興・武、五王の南朝宋に對する通貢も行はれたわけであるが、同じ時代に百濟は南朝に通貢し、高句麗は南北兩朝に入貢してゐた。これらの朝貢は文物輸入のためであると同時に、半島に於ける各々の政治目的貫徹のために行はれたやうである。高句麗が南北兩朝に通貢したのに對して、百濟は後述する唯一回の例外的な北魏通貢を除いては、南朝にのみ通貢したが、それは地理的位置の關係からと共に、夷狄の北朝よりも漢人の南朝を尊んだからであらう。日本が南朝にのみ通貢したのも同じ理由によると思はれる。高句麗は南朝にも通貢したが、北朝に對しては殆ど連年の如く、最も頻繁に入貢した。これは半島の南侵に專念するために後顧の憂を除く必要からであらう。かくて南北朝時代の前半には南朝・百濟・新羅乃至は日本を繋ぐ連合と、北朝・高句麗を結ぶ同盟とが對立する國際情勢にあつたとも言へよう。こゝに於いて中國大陸に於ける南北朝の對立と類似の形勢が半島に於いても見られるのである。そこに日本・百濟の南朝遣使及び高句麗の北朝遣使の意義が見出される。かの五代の倭國王の朝貢も南朝の承認によつて百濟・新羅・任那を保護國として高句麗の南侵を食ひ止めんとする策であつたのである。

百濟は第四世紀の建國以來、日本の援護によつて高句麗に對抗してゐたが、第五世紀に入ると、高句麗は平壤に遷都して愈々その強壓を加へるに反し、漸く勢の衰へた日本の保護や、なほ微弱な新羅の力のみには頼れず、又、南朝の實力を伴はざる名目的な後援にも依つてゐられなくなつたのであらう。果せるかな百濟は嘗て一度も通貢したことのなかつた北朝に向つて西紀四七二年(百濟蓋國王十八年
高句麗長壽王六十年)、始めて使を遣して、高句麗の侵略に苦しむを訴へ、北魏の高句麗出征を乞うたのである。そのことは魏書卷一百百濟傳に述べてあるが、そこに見える百濟王餘慶即ち蓋國王の長い上表文の中には、「醜類漸盛、遂見陵逼」といつて、高句麗の強盛と壓迫とを説き、また「財殲力竭、轉自辱敗」といつて、

自國の窮状を報じてゐるが、これは當時高句麗の壓迫が如何に堪へ難くなつてゐたかを想察せしめる。かかる壓迫に苦しむの餘り、異例の北魏通貢を行つて、高句麗を挾撃すべく北魏の出征を乞うたにも拘らず、同じ魏書百濟傳の後文によると、北魏の時の上皇獻文帝は詔を下して、その中に「卿與高麗不穆、屢致陵犯、苟能順義、守之以仁、亦何憂於寇讐也」などといつて、儒教的言辭を並べ、更に「高麗稱藩先朝、供職日久、於彼雖有自昔之釁、於國未有犯令之愆、卿使命始通、便求致伐、尋討事會、理亦未周」と言つて、結局その請を容れずして却けたのである。

當時北魏は南朝といふ大敵を有したのみならず、蒙古方面には強敵の柔然を控へて、連年その侵寇を蒙り、到底、東方の滿洲にまで兵を出して高句麗を討つことなどは不可能事であつた。一方高句麗も亦、平壤遷都以來、その重心が南に移つて、半島の經營に忙しかつたから、北魏と高句麗との間は嘗て一つの戦争も無い平和状態で、高句麗は北魏につて最大の朝貢國であつたのである。かくては如何なる百濟の要請があらうとも、北魏が高句麗に兵を加へる筈もない。こゝに百濟は折角、北魏に通貢しながら、その望む所を達し得なかつたので、以後北魏と結ばんとする企を斷念して、遂に北魏の滅亡まで全く通貢しなかつたのである。而してこのただ一回の北魏通貢の後、僅か三年にして、前に述べた百濟の國都漢城の陥落と蓋鹵王の戦死及び熊津遷都といふ百濟有史以來の悲劇的事件が起つたのである。當時の百濟が如何に他國の救援を切望しなければならなかつたかはこれによつて明瞭であらう。だからこそ今まで何の縁も無く反つて敵國高句麗と親しい所の北魏の武力さへも借らんとしたのである。

四

さて以上の如く北魏に對する請援が失敗すると、直ぐに又この危急を救ふべく、日本及び南朝に對する百濟の畫策が

見られる。百濟の國都漢城が陥落するや、雄略天皇が百濟の請に應じて、地を久麻那利（熊津）に賜ひ、其の國を再興せしめられたことや、日本にあつた末多王（東城王）に兵器・軍士をつけて百濟に衛送し、王位に即かしめたことなどは日本書紀雄略紀の傳へる有名な話である。

百濟が南朝に入貢したのは東晉末以來の繼續であるが、その朝貢は常に南朝の冊封の權威に頼つて高句麗と對抗せんとする政治的意圖を持つて居た。そしてかゝる性質の朝貢は、北魏通貢の失敗や漢城陥落の後、特に盛になつたのである。そして南朝の威力を更に多く借りる必要から、その心證を出來るだけよくしようとした結果、次に述べる如く遂に事實にあらざる虛説をも捏造して、それを南朝に宣傳してその意を迎へるまでに至つたのであらう。

北魏に通貢して北魏の賴むに足らざるを悟つた百濟は北朝と斷つて、愈々南朝に賴らうとして、遂に北魏の百濟侵入説を慥へ上げて南齊に朝貢した。即ち南齊書の百濟傳には永明八年（西紀四九〇年）百濟東城王十二年（西紀四九五年）に係けて、

是歲、魏虜又發騎數十萬、攻百濟入其界、牟大（東城王）遣將沙法名・贊首流・解禮昆・木干那、率衆襲擊虜軍、大破之、

といふ北魏の大軍の百濟侵入の記事が見え、その直ぐ後に「建武二年（西紀四五五）、牟大遣使上表曰」として以下に東城王のこの戰役に於ける捷報、及びその戰功將士に對して軍號を賜はらんことを求めた上表文を載せてあり、そして同傳の最後にはその求めに應じて軍號を賜はつたと記してある。この南齊書の記事によれば、遠く離れて互に地を接してゐない魏の軍が百濟に侵入したと言ふ。一體、これは事實であらうか。これは既に池内宏博士が、その著「日本上代史の一研究」（一五六頁）に於いて、

永明八年魏虜が數十萬騎を發して百濟の界に攻め入つたといふ記事は、疑ひもなく本書（南齊書）の編著者が東城王の此の上表を據所として書き添へたものであるが、上表そのものにいふところの戦役は、東城王が北魏の敵國たる南齊から官職の除授を得たいが爲めにことさら捏造した事實にちがひない。さうして三國史記の編者は、又た南齊書に據りながら、其の年次を誤つてこれを二年前なる東城王十年に係けたのである。かくの如く百濟の東城王は中國に對して國際上の小刀細工を用ふることを敢てした。しかもそれには相當の理由のあることで、當時自國の勢力の衰へた結果、虚勢を張るべき一の手段として、なるべく多く中國の威力を假りることを必要としたからである。⁽⁶⁾ と斷ぜられた通りであらう。但し資治通鑑卷百三 齊紀二を見ると、「永明六年、魏遣兵擊百濟、爲百濟所敗」とあるが、この記事は南齊書百濟傳に基づき乍らその年次を誤つたものに相違ない。而して永明六年は東城王十年に當るから、三國史記は通鑑の年次に従つて誤つたものであらう。何れにしても魏の百濟侵入は池内博士の言の如く、當時の百濟が窮餘の末に捏造した説であるに相違ない。然るに南齊で百濟の請を容れて、所謂永明八年の役に戰功を立てたといふ沙法名以下前記數人の將軍に對して稱號を授けて居るのは、南朝が之を捏造と思はず事實と信じたことを示すものである。⁽⁷⁾ 百濟の苦肉の策は成功したのである。何故かゝる虛説が信ぜられたのであらうか。いくら南朝でも北魏と百濟との距離が極めて遠く、その間には高句麗といふ國も介在するのだといふ位のことは知つてゐさうなものである。若しかすると、當時の南朝では百濟の領土と魏とが互に地を接してゐると想像してゐたのではなからうか。

こゝまで考へて來ると、始めて主題の百濟の遼西領有説の謎が解けるやうである。當時百濟は晉の時以來ずつと遼西を有してゐたやうに南朝に對して虚構の宣傳をしたのであらう。だから南齊では百濟領の遼西に北魏の侵入があつたの

だと素直に受取つて怪しまなかつたのであらう。この頃北魏と南齊との間は交戦状態にあつたのであるから、魏の侵寇を撃退したと言ふ上表は南齊に最も歓迎され、従つてその効果も期待せられた筈である。これこそ百濟が高句麗の壓迫に對抗せんとする苦心の捏造であつたのであらう。⁽⁸⁾

故に百濟の遼西領有説が南朝の史籍にのみ見えるのも當然なのである。そしてこれは南齊時代のみでなく、宋書・梁書にも傳へてあることから考へると、ほぼ南朝時代を通じて信ぜられたのであらう。

五

それでは、かやうな百濟の捏造が南朝側にいとも簡単に信ぜられた理由は何であらうか。それは主として南朝の東方に關する地理的知識缺如のためであると思はれる。古代に於いて、中國から東方に行く交通路は、今の河北省方面から遼東に出で、更に朝鮮半島に赴くか、或は山東半島から廟島列島を経て、遼東半島の東岸を傳はつて、朝鮮半島に行かの何れかを取るのが普通で、直接中國の江南、揚子江下流地方から東支那海を横断する航路は隋唐以前にはあまり行はれなかつたやうである。従つて、その何れの東方交通路をも北朝側に抑へられた南北朝時代に、南朝と東方との間の交通は容易でなかつたであらう。南朝に對する高句麗の遣使船が山東半島附近で北魏に捕へられた記事が魏書卷一高句麗傳に見えるのも、東方諸國が南朝に對する遣使の困難さを示してゐる。⁽⁹⁾ この交通の困難に加へて、江南の地に足踏して、漢魏帝國のやうに遠大な計畫を持たなかつた南朝は外夷のことにはそれ程の關心を示さなかつたので、東方諸國の遣使に對しても、少しも報聘の使者を出さなかつたから、南朝の東方に關する地理的知識は前代よりも反つて衰へた如くである。例へば魏志や晉書の倭人傳と宋書・南齊書・梁書の倭國傳とを比べると、前者には地理・風土的記述がある

のに、後者にはそれが無いことは著しい差異であるが、これもそのためではなからうか。このことは魏晉史籍の韓傳・高句麗傳などと南朝史籍の百濟傳・新羅傳・高句麗傳などを比較する場合にも當てはまるやうである。かくて梁書に至つては、かの無何有の郷、扶桑國のことなどが麗々しく東方の高句麗・百濟・新羅・倭等の諸國と同列して記載されてゐるのである。⁽¹⁰⁾ かかる南朝の東方に關する地理的無知識が容易に百濟の遼西領有の説を信ぜしめたのであらう。

註(1) 通典卷一百邊防典一の百濟の條には「晉時、句麗既略有遼東、百濟亦據有遼西、晉平二郡矣」とあるが、これは單に梁書の記述を無批判に採つたものである。隋書や新舊兩唐書など他の隋唐史籍は、何れも百濟の遼西領有説を採用してゐない。從つて文献通考が通典の此の記述を探らなかつたのは當然である。

- (2) 滿洲歴史地理 第壹卷 第四篇 晉代の滿洲 二二八—二三八頁、二四一頁、二四四頁、二七八頁
- (3) 同上 第五篇 南北朝時代の滿洲 二九五頁、三〇六—三二〇頁
- (4) 池内宏博士「上代日本史の一研究」第六章 高句麗長壽王の時代に於ける半島の形勢 一三八—一五八頁
- (5) 今西龍博士「百濟史研究」一〇九一一一〇頁
- (6) 池内博士「上代日鮮交渉史要(上)」(共同研究古代國家五九頁)にも、これと同じ語が載せてある。
- (7) 末松保和博士「任那興亡史」第五章 任那の衰退(二) 百濟の南齊通交 一一〇一一一四頁
- (8) 百濟のかゝる對外政策はかの上哆利以下の四縣を日本より割譲せしめた方策などと思ひ合せれば、強國に圍繞せられた弱國百濟として、已むを得ざる手段なのであらう。
- (9) 魏書卷一百高句麗傳に「時、光州(山東掖縣)於海中、得璫所遣詣蕭道成使餘奴等送闕、高祖(北魏孝文帝)詔責璫曰」(以下略)とある。
- (10) 白鳥庫吉博士「梁書の扶桑國に就いて」史學雜誌二十二ノ十二(講演要旨)